

Lesson 23 Beginning Theory 4 - The Modes Continued

Lesson 23 基礎理論 4 - その他モード

モードは7種類あって、それはメジャースケールが7つの音で構成されているから。

モードを簡単に説明すると、メジャースケールの各構成音（Cメジャーの場合はドレミファソラシの7つ）から始まる7種類のスケールのことで、それぞれ固有のサウンドを持っている。

面白いもので、同じ音しか使っていないのに、始まる音が違うだけで全く違うサウンドになる。

(0:58)

それじゃあ、最初のモードに取り掛かろう。

それはシンプルに「ドレミファソラシド」という並びで、ラテン語で「イオニアン」モードと呼ぶよ。

-playing(1:11)- (こんな感じのサウンドだ)

(ここでのダイアトニックコード的には) Cトライアドだね。

次に、(Cメジャーのダイアトニックコードの) 2番目のトライアドはDmだから、(Cトライアドの) 3つの音それぞれをCメジャースケールに沿って1つ上げてやる。

ド→レに、ミ→ファに、ソ→ラという具合にね。

(その結果、「レファラ」つまりDmになるが、依然としてその3つはCメジャースケールの構成音であるところに着目)

だから、Cメジャースケールを、その2番目の音のD(レ)から弾き始めると…

-playing(1:53)-

2番目のD(レ)から弾き始めているだけで、Cメジャースケールと同じ構成音しか使っていないよ。

-playing(2:02)- ((イオニアンとは)全然違う響きだよね。)

これがCメジャースケールの2番目の音のD(レ)から弾き始める、いわゆるドリアンモードと呼ばれるやつだ。コード的にはDmだね。

(2:37)

3つ目のモードは、Cメジャースケールの3番目の音であるE(ミ)から弾き始めて、コード的にはEmだ。

ここ(4弦2フレットE)からCメジャースケールを弾き始めるんだね。

-playing(2:56)-

(3:10)

もしかしたら、スケールはたくさんありすぎて…と思っているかもしれないけど、このように、違う音から始まるCメジャースケールがたくさんある、という風に理解すればいいんだ。

そして、このCメジャースケールの3番目の音から始まるスケールをフリジアンモードと呼ぶよ。

(3:23)

今回は4番目の音から始めるリディアンモードだ。

-playing(3:36)-

コード的にはFだね。

C、Dm、Em、そしてF…F△7かな。

4番目のモードだね。

(4:08)

Fコードとその背後にあるスケールを見てみると、増4度(B)が入っているよね。

つまりリディアンモードを特徴付けるのは増4度なんだね。

(訳者注：Cメジャースケールの4番目の音であるFからCメジャースケールを弾き始めるのがリディアンモード。その4番目の音が、Fメジャースケールにとって増4度にあたる)

-playing(4:28)-

(4:38)

増4度だね。

Fメジャースケールの4度は…(4:48)

独特のサウンド、これがリディアンモードの雰囲気なんだね…これ(ボーシング)もいいね。

(5:03)

5番目のミクソリディアンモードは前回やったよね。

僕が「G7スケール」と呼んでいたやつだ。

このCメジャースケールの5番目の音から始まるスケールだね。

-playing(5:17)-

これがミクソリディアンモードだ。

(5:23)

今回は6番目の音から始まるモード…コード的にはAm。

-playing(5:28)- (これまたこれまでと違ったサウンドだね)

(5:53)

Cメジャースケールをその6番目の音(A)から弾き始めたスケール、これをエイオリアンモードと呼ぶ。

(6:01)

最後の7番目のモードはロクリアンモードと呼ぶんだけど、これだけは他のモードとは少し違う形で使うよ。

ロクリアンはCメジャースケール上の7番目のディミニッシュコードになる。(6:20)

-playing(6:29)-

スケールの的には…

-playing(6:44)-

このモードに関しては、オルタードコードを使ったII-V-I進行にも関係してくるから、また後でやるつもりだよ。

とにかく、モードのポイントは「1つのスケールから、自動的に7つのスケールを導き出せる」ということ。つまり、Cメジャースケールが分かっているならば、それを構成する7つの音、そして、その7つの音それぞれをルートとした(トライアド)コードをプラットフォームとして、各スケール(モード)を把握すれば、コードに沿ったアドリブが出来るようになる。

例えば、Key in Dm でアドリブを弾く際は、Cメジャースケール(の2番目の音から始めるCメジャースケール=Dドリアン)を弾いてやればいいんだ。

【注記】

- ・押弦するポイントについて Robben は様々な言い方をしていますが、ここでは「5弦3フレットC」「6弦開放E」などの表記に統一します。
- ・翻訳モノにありがちな読み難さの一因となっている「直訳」を排除した結果、Robben の実際の言葉とは若干違った表現になっている箇所がありますが、読者にとってのストレスのない自然な理解を促すためのものであり、Robben が言わんとしていることはそのままに、大局を損なうことのない翻訳を心がけました。
- ・モードの解説において「○○スケール」と「○○モード」の言葉の使い分けはせず、Robben の言に最大限忠実に訳しながらも、より理解をしやすいように、柔軟にそれぞれを言い換えて訳しているケースもあります。

翻訳 山岸敦